

「
パ
パ
の
シ
ャ
ツ
タ
ー
が
聞
こ
え
る
」

○ 梗概

向井真一（77）は、かつて横浜で写真館を営む腕利のカメラマンだった。写真を撮ることに生きる喜びを見出していた。しかし、20年前の春、ひとり娘の向井マミ（当時17）を写真館の前で交通事故により亡くす。それ以来、真一は塞ぎ込み写真館も畳んでしまう。写真から距離を置いていた真一だったが、妻の向井恵子（74）の写真だけは撮り続けた。マミの面影が恵子にはあるからだ。恵子を撮ることでマミを思い出しているのだった。

そんなある日、マミと最後に訪れた箱根の芦ノ湖に恵子と出かけることにした。遊覧船の前で恵子の写真を撮っていると、突然真一は倒れ、少し不思議な世界へと迷い込む。そこには、死んだはずのマミが成仏せずにいたのだ。マミと20年ぶりの再会を果たした真一は、徐々に変わっていく。20年に及ぶ冬の時代が終わりを告げ、春が訪れたのだった。

ボランティア活動に参加した恵子だったが、持病の心臓発作で倒れてしまう。病院に駆けつけた真一に、どこからかママが語りかけ、恵子を助けるために、すぐに芦ノ湖まで会いに来るように告げる。日が沈む直前に芦ノ湖に辿り着いた真一は、再びママと再会する。

どうやら、亡くなる直前にママにプレゼントしたペンダントに、ママが成仏する時に放たれるエネルギーを閉じ込めると恵子が助かるかもしれないと言う。ただし、成仏すると二度とママには会えなくなる。ママは自らの成仏と引き換えに、恵子を助けようとしたのだ。そして、恵子は無事に助かった。

改めて恵子と共に芦ノ湖へ出かけ、遊覧船で恵子の写真を撮ると、そこに写っていたのはママそのものだった。

○ 登場人物

向井 真一（77歳） 元は写真館を営むカメラマンだった。普段は温厚だが、写真を撮ると性格が変わる。

向井 恵子（74歳） 真一の妻。穏やかな性格。心臓の持病を抱えている。

向井 マミ（死亡時17歳） 真一と恵子の娘。明るく素直で元気な女の子。17歳の時に交通事故で亡くなる。

※他に、通行人や駅員、近所の主婦などが登場します。

S E ウィーン（電車が駅のホームに入ってくる音）

駅員「原宿ー。原宿ー。明治神宮はこちらでお降りください。」

S E ガヤガヤガヤ（雑踏の音）

S E ザッザッザッ（砂利道の参道を歩く二人の足音）

S E ザッ（急に足音が止まる）

真一「よし。今日は、この本殿の前で写真を撮るとしようか。」

恵子（不安そうに）「あなた！また私を撮るんですか？」

真一「いいからいいから。さあ、そこに立って。こっちを向いて。」

恵子「昨日だって浅草の雷門の前で一日中私の写真ばかり撮ってたじゃないですか！」

真一「まあまあ、つべこべ言わずに。さあ、こっちを向いて。早く。」

SE カシヤカシヤカシヤ：（シャツタ
I音が執拗に続く）

M

恵子「あなた！もういいんじゃないですか？もう十分撮ったでしょ。」

真一「まだまだこれから。いいから黙ってこっちを向くんだ。」

SE カシヤカシヤカシヤ

通行人の若い男「なあ。あの爺さん、さっきからずっと本殿の前を占拠してるよ。」

通行人の若い女「ほんつとに迷惑よね。私たちだってあそこで撮りたいのに。早くどけて感じ。」

SE カシャカシャカシャ

恵子「あなた！もういい加減にしてください

い！」

真一「うるさい！黙って俺の言う通りにすればいいんだ！」

SE カシャカシャカシャ

通行人の若い男「うわ！爺さんついにキレだしたよ。」

通行人の若い女「お婆さん泣きそうじゃん。神様の前でキレルなんてサイテー。」

SE カシャカシャカシャ

恵子「あなた！」

真一「うるさい！」

SE カシャカシャカシャ

恵子「私、もう帰ります！！！」

真一「恵子！待て！待つんだ！もっと撮らせてくれ！」

SE ザッザッザッ（走るように帰っていく音）

真一「恵子…。」

M

真一 M 「私の名前は、向井真一。かつては横浜で写真館を営むカメラマンだった。私にとって、写真を撮ることは生きることそのもの。シャッターを押すたびに、心がウズウズ蠢く。

ほどだった。しかし、20年前のある出来事をきっかけに、写真館を畳んだ。それ以来、妻の恵子の写真ばかり撮るようになってしまった。」

真一「はあ…（ため息）」

SE カチャ（ソーサーを置く音）

恵子「あなた、お紅茶を淹れました。」

真一「ああ、ありがとう。」

恵子「あの…。さっきは、ごめんなさい。先に家に帰ってしまっ…。」

真一「いやいや、俺が悪かった。いつもの悪い癖で。ついな。」

恵子「あなた、家の中でもまだカメラを触つて。もう、写真館を畳んで20年経つんですよ。」

真一「…ああ。」

恵子「いつまで思い出に浸ってるつもりですか？」

真一「…分かってる。」

恵子「それから、どうしていつもいつも私の写真ばかり撮るんですか？」

真一「…それは。」

恵子「普段のあなたはとても穏やかなのに、私の写真を撮ってる時は、何かに取り憑かれたように、人が変わってしまおう。一体どうしたんですか？」

M

真一「…似ているんだ。」

恵子「似ている？誰にですか？」

真一「ママだよ。恵子に、ママの面影があるんだ。だから、恵子の写真を撮っているとき、ママに会っているような気持ちになっ
てな。」

恵子「…そうだったんですか。確かにマミは、私にそっくりでしたからね。」

真一「恵子の写真を撮っている瞬間は、幸せだった頃に戻れるんだ。だから、つい歯止めが効かなくなってしまうんだ。」

恵子「マミが亡くなってもう20年。私たちにとって長く苦しい20年でしたからね。」

真一「はあ…（ため息）。時々思うんだ。」

恵子「何をですか？」

真一「シャッター押すと、魔法がかかってマミが会いに来てくれるんじゃないかって。バカげていると分かっているんだけどな。」

恵子「会いに来てくれたらどんなにいいことか。はあ…（ため息）。」

M

真一 M 「我が家にはひとり娘がいた。マミと
いう名前の可愛らしい女の子だった。マ
ミは高校2年生の始業式の日亡くなっ
た。学校からの帰り道、写真館の目の前
でダンプカーに轢かれた。」

S E 「キキーツ！」（急ブレーキの音）

S E 「ドンッ」（衝突する音）

真一 M 「即死だった。その時私は写真館にい
が、撮影に夢中で気が付かなかった。す
ぐに駆けつけてやらなかったことを、今
でも後悔している。」

S E 「ピーポーピーポー」（救急車の音）

真一 M 「亡くなる前日、私は制服姿のマミの
写真を撮った。進学祝いにプレゼントし
た七色に輝くオパールペンダントを首

に付けて。それはそれは、本当に綺麗だった。」

SE カシヤカシヤカシヤ

マミ（回想）「パパ！」

真一 M 「それが、そのまま遺影になってしま
うなんて……。」

SE カチャ（ソーサーを置く音）

恵子 「あなた、お紅茶のお代わり入れまし
たよ。」

真一 「なあ恵子。明日は秋晴れのようだ。ど
うだ、久し振りに箱根の芦ノ湖に行っ
てみないか？」

恵子 「芦ノ湖ですか？」

真一 「嫌か？」

恵子 「いえ……。でも、マミと行った最後の家
族旅行が芦ノ湖だったから。」

真一「だから、久しぶりに行こうと誘ってるんだ。」

恵子「私、なんだか怖いです…。」

真一「あの日、みんなで乗った遊覧船に乗りたいたんだ。ママは、あの遊覧船が大のお気に入りだったからな。」

恵子「そういえば、楽しそうに乗ってましたね。まるで、小さな子供みたいにはしゃいじゃって。」

真一「芦ノ湖に行って写真を撮れば、ママに会えそうな気がするんだ。」

恵子「分かりました。でも、私の写真は程々にしてくださいね。」

真一「分かってる。」

SE ウィーン（ロープウェイの音）

駅員「まもなく、ロープウェイ箱根駅に着きます。お忘れ物なさいませんようご注意ください。」

SE ガタン（ロープウェイの扉が開く音）

M

真一「ああ！芦ノ湖まで来ると空気がうまいな。」

恵子「横浜とは違いますね。葉っぱが赤と黄色に染まって綺麗だわ。あなた！小鳥のさえずりが聞こえてきますよ。」

SE チュンチュン（小鳥のさえずり）

恵子「紅葉シーズンに来て良かったわ。」

真一「さあ恵子、遊覧船の前で写真を撮ろう。」

恵子「あなた。あまり撮り過ぎないでください。お願いしますよ。」

真一「分かってる。」

S E カシヤカシヤカシヤ

真一「恵子！もうちょっと右に寄って！右

だ！あと半歩！」

S E カシヤカシヤカシヤ

恵子「もうそろそろいいんじゃないですか。」

真一「まだまだこれからだ。カシヤカシヤ撮りまくるんだ。」

S E カシヤカシヤカシヤ

S E カシヤ：（いきなり止まる）

恵子「あなた、もうおしまいですか？」

真一「（無言）」

恵子「あなた？どうしたんです？」

真一「（無言）」

恵子「あなた？あなた？」

SE バタン（真一が倒れる音）

恵子「あなた！しっかりしてください！あなた！あなた！（F0）」

SE チュンチュン（小鳥のさえずり）

真一「う…、うん？おかしいな。写真を撮ってたんだが。一瞬、辺りが真っ暗になったようだ。」

SE チュンチュン（小鳥のさえずり）

真一「恵子？おい、恵子はどこに行った？」

マミ「ここよ。」

真一「おお！恵子。そこにいたか。さあ、続きを撮ろう。」

マミ「ママじゃないわ。私よ。」

真一「え？」

M

マミ「マミよ。」

真一「マ…、マ、マミ！？どうしてマミが！？」

マミ「さあ、どうしてでしょう。」

真一「本当にマミなのか？夢か？夢じゃないのか？」

マミ「夢じゃないわ。間違いなく本物の私よ。だって、まだ成仏してないんだもん。」

真一「し、信じられん…。」

マミ「パパに会うの20年ぶりね。」

真一「まさか、ずっとこの世を彷徨っていたのか？」

マミ「そうよ。まだ成仏できないの。」

真一「どうしてだ？亡くなってもう20年も経つんだぞ。」

マミ「それは…。」

SE ブオーー（遊覧船が出発を知らせる汽笛の音）

マミ「パパ！遊覧船が出ちゃうわ！乗りましょう！」

真一「マミ！？どうしたんだ！？。マミ！」

SE ダッダッダッ（走る二人の足音）

マミ「待ってー！二人乗りまーす！」

係員「急いでくださーい！」

SE ダッダッダッ

SE ガシャーン（扉が閉まる音）

マミ「ハア、ハア、ハア。（息を切らせている）」

真一「ハア、ハア、ハア。」

マミ「ハア、ハア。なん…とか…間に合ったわね。ハア…。」

真一「ハア、ハア。ギリギリセーフ…だったな。ハア…。」

マミ「ねえパパ。デッキへ出てみようよ。」

真一「ああ。」

SE カンカンカン（鉄製の階段を昇る二人の足音）

SE ガシヤ（扉を開ける音）

M

マミ「うわー！キレイ！見渡す限りの青い湖面！」

真一「おお！湖面に青空が反射してるな！」

マミ「ねえ、パパ？」

真一「なんだ、マミ。」

マミ「最後の家族旅行のこと覚えてる？」

真一「もちろん。あの日も、今日のような秋
晴れだった。」

マミ「私、あの日ね、すごい楽しかったん
だ。」

真一「この遊覧船に乗って、随分はしゃいで
たからな。高校生じゃなくて、まるで小
学生みたいだった。」

マミ「まさか、それが最後の家族旅行になる
なんてね。」

真一「…ああ。」

マミ「パパ、私がいなくなった後の20年は
どうだった？」

S E ブオーーー（汽笛）

M

真一「長くて暗い出口のないトンネルの中を
彷徨ってるようだったよ。…苦しかっ
た。」

マミ「…そうよね。私もまだ高2になったばかりで、これからって時だったもんね。」

真一「あの事故を思い出すだけで、今でも心が引き裂かれそうになる。」

マミ「私ね、段々意識が遠のきながら、パパの『カシャカシャ』っていうシャッターの音が微かに聞こえてきたの。」

真一「カシャカシャ、か…。」

マミ「写真館の中で育ったから、きっとシャッターの音が印象に残っていたんだと思う。」

真一「マミは、マミの17年間は幸せだったのか？」

マミ「もちろん。パパの娘に生まれてよかったわ。」

真一「…そうか。」

SE ブオーー（汽笛）

マミ「そろそろ、遊覧船も終わりね。もう一周しちゃった。」

真一「マミは、この後どうなるんだ。」

マミ「私はここに残る。芦ノ湖から出られないわ。」

真一「どうしてだ？」

マミ「どうしても。死んでしまうと、成仏するまでは、行動が制限されるの。」

真一「また……。会えるのか？」

マミ「きっとね。」

真一「きっと……か。」

マミ「パパがどうしても私に会いたくなったら、よーく晴れた日にまた芦ノ湖に来て。」

真一「今日みたいな快晴の日にか？」

マミ「そう。そして、カメラのレンズを覗き込んでこう言うの。」

真一「なんだ？」

マミ「『カシャカシャ』って。これが私に会うためのおまじないよ。」

真一「カシャカシャ、か……。」

S E ブォー―

マミ「遊覧船が岸に着くわ。」

S E ガタン（遊覧船が岸に着く音）

マミ「パパ、じゃあね。」

真一「マミ……。きっと、また会えるよな。」

マミ「きっと会えるわよ。」

真一「じゃあなマミ。またなマミ。」

マミ「うん、またね。」

S E ブォー―

真一「マミ……。マ……。うっ！」

S E チュンチュン（小鳥のさえずり）

真一「め、眩暈が……。ああ！」

SE バタン（真一が倒れる音）

SE チュンチュン（小鳥のさえずり）

恵子「（声が徐々に大きくなる）：あなた！
あなた！」

真一「う：、ううん？」

恵子「あなた！ああ、よかった！意識が戻っ
たんですね！」

真一「あ、あれ？マミは？マミはどこに行っ
たんだ？」

恵子「何を言ってるんですか、あなたは。写
真を撮っていたら、急に倒れたんじゃない
いですか。」

真一「し、しかし、さっきまでマミと一緒に
遊覧船に乗っていたんだぞ。」

恵子「何のことですか。きっと夢を見ていた
んですよ。それに、今日は定期メンテナ
ンスで遊覧船はお休みらしいですよ。」

真一「そ、そんなバカな…。」

恵子「もう十分写真を撮ったでしょう。そろそろ、帰りましょうよ。ほら、もうすぐ電車が出発しますよ。」

真一「マミ…。」

SE ガタンゴトン（電車の音）

真一 M「あれは、夢だったのか。それにしては、随分とはっきりした夢だった。まるで、手を伸ばせばマミに触れられそうだった。」

SE ガタンゴトン

真一 M「でも、夢でもいい。マミに会えたんだ。会いたくて会いたくてたまらなかったマミに会えたんだ！」

SE ガタンゴトン

マミ（回想）「パパ！」

SE ブオーーーン（電車の警笛音）

真一 M 「その日以来、私は変わった。マミを失った悲しみに暮れていた20年が終わりを告げたのだ。長い長い冬のような年月だった。そして、77歳にして第二の青春が始まったかのように、私の心は穏やかな春を迎えた。」

SE カチャ（ソーサーを置く音）

恵子 「あなた、お紅茶を淹れました。」

真一 「ありがとう。」

SE キュツキュツ（カメラのレンズを磨く音）

恵子「相変わらず、カメラのお手入れに余念
がありませんね。」

真一「ああ。」

M

恵子「ねえ、あなた。」

真一「なんだ？」

恵子「最近どうしたんですか？」

真一「ん？どうしたって？」

恵子「随分と楽しそうじゃないですか。」

真一「そうか？」

恵子「ええ、とつても。芦ノ湖に行ってから、
別人のようですよ。」

真一「芦ノ湖：か。」

恵子「それに、あんなに私の写真ばかり撮っ
ていたのに、今はどうでしょう。小さな
子供や子猫の写真を撮るようになって。
随分と変わりましたね。」

真一「そうかもな。」

恵子「表情も、だいぶ穏やかになりました。」

真一「…ママが。」

恵子「ママがどうしたんですか？」

真一「あの日以来、ママがそばで見守ってくれてる気がするんだ。」

恵子「あなた、またそんなこと言って。夢でも見ていたんですよ。」

真一「夢じゃない。」

恵子「素敵な夢ですよ。」

M

恵子「私ももう74歳。そろそろ終わりが見えて来ました。持病の心臓も、最近は特に調子が悪いんです。だから、いつ万が一のことがあってもおかしくありません。私だって、最後に夢でもいいからママに会ってみたいですよ。」

真一「恵子、そんな悲しいこと言うなよ。」

恵子「ママの口から『ママ』って呼んでくれ
たら、どんなに幸せでしょう。」

真一「恵子…。」

恵子「でも、いつまでもクヨクヨしているわ
けにはいけないじゃないですか。ママだ
って、私たちのそんな姿を見たくないは
ずです。」

真一「…ああ。」

恵子「だから、辛くても前を向いて生きてい
くしかないんです。」

真一「そうだな…。」

恵子「さあ、明日は地域の清掃ボランティア
の日。朝が早いから私はもう寝ますね。
おやすみなさい。」

真一「おやすみ。」

SE バタン（ドアが閉まる音）

真一 M「恵子の言う通り、あれは夢だったの
か。」

マミ（回想）「パパ！」

真一 M 「いや、夢じゃない。あの時、あの場所
所に確かにマミはいた。マミはいたんだ！」

SE チュンチュン（小鳥のさえずり）

恵子 「あなた、おはようございます。」

真一 「おはよう。」

恵子 「じゃあ、私は清掃ボランティアに行きますからね。朝ごはんは作ってあるので、自分で食べてください。」

真一 「ああ。」

恵子 「お昼前には戻りますからね。行ってきます。」

真一 「気をつけてな。」

SE バタン（ドアが閉まる音）

真一「さて、カメラの手入れでもするか。」

S E キュツキュツ（レンズを磨く音）

S E チクタクチクタク（掛け時計の振り子の音）

S E ボーンボーン（時計が12時を告げる音）

真一「もう昼か。恵子の奴、帰りが遅いな。どうせ立ち話でもしてるんだろ。」

S E キュツキュツ

S E チクタクチクタク

S E ピーポーピーポー（遠くから聞こえる救急車の音）

S E ボーン（時計が1時を告げる音）

真一「1時だ。まだ恵子は帰らんのか。」

S E ドンドン（ドアを激しく叩く音）

近所の主婦（叫んでいる）「向井さん！向井さん！」

真一「なんだなんだ。騒々しいな。」

S E ドンドン

近所の主婦「向井さん！大変よ！」

S E ガチャ（ドアを開ける音）

真一「どうしたんですか。そんなに慌てて。」

近所の主婦「奥さんが、恵子さんが倒れたの！」

M

真一「えっ！？恵子が！？」

近所の主婦「清掃ボランティアが終わって片付けをしていたら、突然倒れて。駆け寄って声をかけても意識がないのよ！」

真一「恵子は心臓が悪いから、発作が起きたのかもしれない！」

近所の主婦「さっき救急車で市民病院に搬送されていったわ。すぐに向かって！」

真一「わかった！」

SE ダツダツダツ（走る音）

真一「ハア、ハア、ハア（息を切らせている）。」

真一（心の声）「恵子！どうか無事でい
れ！恵子！」

真一「ハア、ハア、ハア。」

SE ダツダツダツ（病院の階段を駆け
上る音）

真一「ハア、ハア、ハア」

SE ガチャ（病室のドアを乱暴に開け
る音）

真一「恵子ー！」

SE ピ：ピ：ピ：ピ：（弱々しい心電図の
音）

真一「恵子！目を覚ましてくれ！」

S E
ピ：ピ：ピ：

真一「恵子！頼む！」

S E
ピ：ピ：ピ：

M

マミ（真一の心に呼びかける）「パパ！」

真一「ま、マミ！？マミなのか！？」

マミ「パパ、落ち着いて。私の言うことをし
っかり聞いて。ママは今、危険な状態な
の。」

真一「どうして分かるんだ？」

マミ「ママは、彼岸と此岸の狭間を彷徨って
るわ。一步間違えると彼岸へと行ってし
まうかもしれない。」

真一「マミ！どうすれば恵子は助かるん
だ！？」

マミ「パパ、安心して。もう一度芦ノ湖へ来て。私に会いに来て。」

真一「芦ノ湖へ行けば、マミに会えば助かるのか？」

マミ「保証はできない。でも、助かるかもしれないわ。幸い、今日は快晴だから私に会える条件は揃っている。でも、夕日が沈んだら会えなくなってしまう。さあ、パパ！急いで！」

真一「わかった！」

SE ガタンゴトン（電車の音）

真一 M 「日没まで時間がない！1秒でも早く芦ノ湖に着いてくれ！マミ！頼むから恵子を助けてくれ！」

SE ガタンゴトン

マミ（回想）「パパ！急いで！」

SE ブオーーーン（電車の警笛音）

駅員のアナウンス「まもなくロープウェイ箱根駅に到着します。お忘れ物なさいませんようご注意ください。」

SE ガタン（ロープウェイの扉が開く音）

真一「ああ、まもなく夕日が沈む。頼むから見にあってくれ！さあ、急いでカメラを覗き込んで。」

M

真一「『カシヤカシヤ』と言えばいいはずだ。いくぞ、『カシヤカシヤ』。」

SE チュンチュン（小鳥のさえずり）

真一「うっ！め、眩暈が……。こ、これで、ま、
ママに会える、はず……。だ。」

SE バタン（真一が倒れる音）

SE チュンチュン

真一「う、うん？」

SE チュンチュン

真一「間に合ったのか？ママはどこだ？マ
ミ！ママ！」

SE ザッ（足音）

ママ「パパ！」

真一「ママ！」

マミ「日が沈むギリギリだったわね。でも、間に合って良かった。」

真一「マミ！恵子は本当に助かるのか？」

マミ「ママのためにできることはやってみる。」

真一「何をするんだ？」

マミ「パパ、私と遊覧船に乗って。そこで詳しく話すわ。」

真一「分かった。」

SE ブオーー（遊覧船が出発を知らせる汽笛の音）

マミ「デッキまで付いてきて。」

真一「ああ。」

SE カンカンカン（鉄製の階段を昇る二人の足音）

SE ガシヤ（扉を開ける音）

SE ビューー (強い風の音)

真一 「うわっ！」

マミ 「風が強い！」

SE ビューー

真一 「マミ！ここで、何をするんだ？」

マミ 「パパ、この遊覧船は彼岸へと向かう船なの。」

M

真一 「まさか！？」

マミ 「本当よ。いつもは芦ノ湖を一周して元の岸へ戻るけど、夕日が沈む直前の船は岸へと戻らない。」

真一 「戻らない？」

マミ「そのまま彼岸へと進むの。芦ノ湖の遊覧船は、死者を彼岸へと届ける船でもある。」

真一「じゃ、じゃあこのままあの世へまっしぐらってことか!？」

マミ「安心して。パパはまだ死んでないから元の世界へ戻れるわ。」

真一「だって、この船は岸に戻らないんだろ？」

マミ「この船には小型船が備え付けてあるの。それに乗れば、この強い風が岸へと連れ戻してくれるわ。」

真一「マミはどうなるんだ？」

マミ「私は…、今日で成仏するわ。」

真一「成仏するって、あの世へ行くってことか？」

マミ「そうよ。いつまでもここにいられないもん。今が成仏するタイミングだと思おう。」

真一「どうして今がタイミングなんだ？」

マミ「ママのためよ。」

真一「恵子のため？」

M

マミ「死者が成仏する時ってね、一瞬だけ眩しく輝くの。その輝きには、すごいエネルギーが宿ってるのよ。」

真一「エネルギー？」

マミ「そのエネルギーを、私が首にかけているペンダントに閉じ込めるの。」

SE キラン（ペンダントが輝く音）

真一「マミ、そのペンダントは…。」

マミ「そうよ。パパから進学祝いにもらったオパールペンダント。事故があった日も身につけていたわ。」

真一「ずっと大切にしてくれていたのか？」

マミ「もちろん。このペンダントを身につけておくと、彼岸へは行けないの。だから、ずっと成仏しなかったの。」

真一「このペンダントにそんな力が？」

マミ「彼岸はね、アクセサリを嫌うの。キラキラした物を拒むわ。」

SE キラン

真一「そうだったのか。」

マミ「ほら、火葬しても銀歯は焼けずに残るじゃない？あれも、彼岸が拒んでるからなの。」

真一「ペンダントを身につけてる限り、成仏できないのか…。」

マミ「だから、今日でこのペンダントをパパに返すわ。」

M

真一「なあ、マミ。成仏するとどうなるん

だ？」

マミ「…パパとお別れしなくちゃいけない。」

真一「もう…、会えないのか？」

マミ「…うん。永遠に会えない。」

真一「…そうか。」

マミ「…ごめん。」

真一「マミのいない世界なんて…。俺は、俺

は、これから何を支えに生きていけばい

いんだ…。」

マミ「…パパ。」

SE ブォー（汽笛の音）

マミ「パパ！夕日が沈む合図よ。夕日が沈む

と同時に私は成仏する。彼岸へ行くわ。

その瞬間、光ながら消えていくから、パ

パはペンダントを頭上に翳して。」

真一「ついにお別れか…。」

マミ「落ち込まないで。これでママは助かる
かもしれない。」

真一「どうすればいいんだ？」

マミ「私のエネルギーを閉じ込めたペンダ
ントを、ママの首にかけてあげて。私のエ
ネルギーがママを彼岸と此岸の狭間から
呼び戻してくれるかもしれない。」

真一「わ、分かった。やってみる。」

SE ブォー

マミ「夕日が沈む！今よ！ペンダントを頭上
に翳して！」

真一「分かった！」

SE バツ（手をあげる音）

SE ブォー

SE キラキラキラキラ（眩い音がする）

マミ「体が、だ、だんだん、消えていく…。」

S E キラキラキラキラ

真一「ママが…、ママが消えていく…。」

S E キラキラキラキラ

M

マミ（声が掠れながら）「パパ…。私、パパの子供に産まれて本当に…幸せだった…。」

真一「ママ！」

マミ「17年間…本当にありがとう…。」

真一「マミー！！消えないでくれー！！」

S E キラキラキラキラ

マミ「もしも…もしもまた産まれ…変わるなら…パパの子に…になりたい…。」

真一「マミーー！！」

マミ「さよう…なら…。」

SE キラキラキラキラ (FO)

真一「マミーー！！」

SE ブオーー (汽笛が長めに鳴り響く)

SE ガタンゴトン (電車の音)

真一M「マミは消えた。私はマミが成仏するときに放ったエネルギーをペンダントに閉じ込め、恵子の元へ急いだ。」

SE ガタンゴトン

マミ（回想）「パパ！今までありがとう！」

SE ブオーーーン（電車の警笛音）

SE ピ：ピ：ピ：ピ：（心電図の音）

真一「恵子……。まだ目覚めないのか……。」

SE ピ：ピ：ピ：ピ：

真一「なあ恵子。マミは本当にいたんだ。夢じゃなかったんだ。」

SE ピ：ピ：ピ：ピ：

真一「マミがエネルギーを分けてくれた。このペンダントを首にかければ、恵子も助かるはずだ。」

S E カチャ（首にペンダントをかける

音）

S E ピ：ピ：ピ：

真一「頼む…。」

S E ピ：ピ：ピ：

真一「マミ！恵子を手助けてやってくれ！」

S E ピ：ピ：ピ：ピ：ピ：ピ（徐々に心電

図の音が力強くなる）

真一「け、恵子！」

S E ピ：ピ：ピ：

恵子「あ：あ：なた：。」

真一「恵子！！助かったか！！」

恵子「ああ…、私っただらば意識を失って
いたんですね。」

真一「恵子！ママが、ママが助けくれたん
だ。」

恵子「ママ？ママがですか？」

真一「そうだ！ママが恵子の命を救ってくれ
たんだ！」

恵子「そういえば、不思議な夢を見ました。」

真一「どんな夢だ？」

恵子「亡くなる前の日、写真館でママの写真
を撮ったじゃないですか。」

真一「ああ、撮ったな。」

恵子「その時に、ママにあのペンダントを付
けてあげたんです。」

真一「オパールのパendantか。」

恵子「夢の中で、その光景が蘇ってきたんです。もしたらあの子、不思議なことを言
いでして。」

真一「一体、なんて言ったんだ？」

恵子「『このペンダントがママを助けてくれるわ』って。」

真一「まさか！？本当にその通りになるとは
……。」

恵子「それからマミは……。」

真一「マミは？」

恵子「『私の代わりにパパの側にいてあげて
ね』って。そう言うと、光ながら消えて
いったんです。」

真一「ああ！本当に恵子の命を救ってくれた
んだ！マミ！ありがとう！マミ！」

M

真一 M「やがて恵子も無事に退院し、また平
穏な日々が戻ってきた。」

SE カチャ（ソーサーを置く音）

恵子「あなた、お紅茶を淹れました。」

真一「どうもありがとう。」

SE キュッキュツ（カメラのレンズを

磨く音）

恵子「また、カメラのお手入れですか。」

真一「ああ。」

恵子「今度は何を撮るんですか？」

真一「なあ恵子。」

恵子「何ですか。」

真一「また芦ノ湖へ言ってみないか。」

恵子「芦ノ湖、ですか？」

真一「天気もいいしな。それに…。」

恵子「それに、何ですか？」

真一「マミにお礼が言いたいんだ。」

M

S E ウイーン（ロープウェイの音）

駅員のアナウンス「まもなくロープウェイ箱
根駅に到着します。お忘れ物なさいませ
んようご注意ください。」

S E ガタン（ロープウェイの扉が開く
音）

恵子「あなた、冬の芦ノ湖も空気が澄んでい
て気持ちがいいですね。」

S E チュンチュン（小鳥のさえずり）

真一「今日も空が真っ青だ。」

恵子「まるで、あの空の向こうの彼方に違う
世界があるようですね。」

真一「何だか、またマミに会えそうだな…。」

S E ブオーー（汽笛の音）

恵子「あなた！今日は遊覧船が動いていますよ！」

真一「よし！久しぶりに一緒に乗ってみるか。」

S E ブオーー

恵子「あなた！急いでください！」

真一「ああ、今行くよ。」

S E カンカンカン（鉄製の階段を昇る二人の足音）

S E ガシヤ（扉を開ける音）

M

恵子「うわー！見渡す限り湖面が広がってま
すよ！キレイだわ！」

真一「青空と湖面の境目が分からないくらい
だな。」

恵子「ねえ、あなた。ここで私の写真を撮っ
てくださいよ。」

真一「ここでか？」

恵子「いいじゃないですか！久しぶりに私を
撮ってくださいよ。」

真一「ああ、分かったよ。」

SE カシャ（シャッターの音）

恵子「あなた、ありがとう。」

真一「家に帰ったら、早速現像してみよう
か。」

M

真一 M 「遊覧船で撮った恵子の写真を現像して驚いた。マミだ。マミそのものだ。成仏したマミが、もう一度会いにきてくれたような気がした。」

SE カシャ（シャッターの音）

マミ（回想） 「パパ！」

（終わり）